



フィリピンの子どもたちからの応援メッセージ

Contents

- 現地活動報告
フィリピン …P.2
- 日本事務局から
くれよんプロジェクト …P.4
セブ島から Pray for Japan …P.5
スタディーツアー …P.6
キャラクター 「ターシャ」

巻頭言

善意が結び合わされて

HFIは、アジアの貧困地域における教育支援を目的とする国際ボランティア団体である。本来災害復興支援を目的とする団体ではないから、今回の被災地支援については、どんな働きができるものかと思案させられていた。心痛い思いをし、被災地にいる両親や親戚と連絡を取りながら、被災状況を知るにつれ、その被害の深さを思う時に、また遠くにあっては、何もできないと思うところが多かったように思う。

ところがそこに、私たちが経済的にサポートしているフィリピンのスラム地区の親たちから、自分たちができる援助はないだろうかとメールが入ってきた。お金のない人たちが何かをしたいという。難しいが考えた。「では、その気持ちをメッセージに託して送って欲しい」と伝えてみた。たくさんの子どものメッセージ画像が送られてきた。貧しい人たちの日本に対する温かい思いに刺激されながら、HFI自体も教育支援という観点から、小さなことであれ何かできることをやってみよう、というのでスタッフと話し合いながら、くれよんプロジェクトを始めることになった。

スタッフが、長野、関東周辺、福島、宮城、岩手、青森の被災地に関する様々な情報を整理してみる

と、ニーズはたくさんあった。応えられそうなものから少しずつレスポンスしていく中で、意外な困難に出くわすこともあった。しかしありがたいことに、思わぬ出会いと協力関係も与えられた。すでに、多くの犠牲を払って復興支援をしている企業や団体、そして個人が、さらに協力の手を惜しまず援助の手を差し伸べてくれた。なるほど、人助けというのは、一つの善意ではなく、たくさんの善意が手を結び合って可能になるのだ、と実感した。

震災の傷跡は深い。いずれ、町はきれいに整備されていくだろう。しかし、人の心はどうだろうか。たくさんの痛みが癒えていくのはいつのことだろうか。人の立ち直りを考えていく時に、今回の物資支援が、ただ単に一時的なモノの不足を補うというだけではなくて、たくさんの優しい手によって差し出されたものであるがゆえに、後々にも心に力を与えるものになりえたらと思う。

また、緊急性に対する興奮はいつしか冷めていくものだろう。被災地に根ざしていく人が最後まで立ち直りの努力をすることになる。そのような人々と共に中・長期的に何ができるのか、「災害援助」ではない「地域復興」という内輪の発想が、HFIにも必要ではないかと考えた。そこにさらに多くの善意が結びあわされていくことを願うところである。
(HFI代表 福井 誠)